

アマリの構造と解釈

大口, 恵理
西南女学院中学校・高等学校

<https://doi.org/10.15017/1462079>

出版情報 : 九州大学言語学論集. 34, pp.1-46, 2014. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン :
権利関係 :

アマリの構造と解釈

大口 恵理

(西南女学院中学校・高等学校)

eri.oguchi@gmail.com

キーワード：アマリ、統語意味論

1. 序章

本論文では、ことばの意味は、語本来が持つ意味、構造に拠って変容した意味、そして世界知識から補われる意味が組み合わさり、成り立っていると考えられる。これまでの日本語学の研究で、多くの言語現象についてさまざまな観察が行われている。しかしそれらは、ことばの意味というものを明確に区別していないために、表現の本質が明らかにされていないことが多い。それぞれの研究の立場や目標の違いはあるにせよ、やはり、ある表現の本質が何かということをも明らかにすることは意味のあることである。本論文では、アマリを対象として分析を行う。そこで、次のように問題提起する。

- (1) a. **Lexicon** には何種類のアマリが登録されており、それぞれどのような指定がされているのか。
- b. アマリと他の表現とがどのように組み合わさり、どのような意味が生じるのか。

この問題を解決するために、本論文では統語意味論と呼ばれるアプローチをとる。次章からの本論文の構成を以下に示す。

2章では、これまでのアマリの研究について記述する。これまでの研究には、アマリのさまざまな特徴を、主に否定と呼応するアマリと呼応しないアマリに大きく分け、その中でそれぞれの構文を細かく記述しているものも多く見られる。しかしこれらは、アマリという表現の本質を明らかにしようとするものではない。

3章では、統語意味論の枠組みを紹介する。本論文では、アマリの本質を明らかにすることを目標とするため、それを試みる統語意味論のアプローチから

分析する。統語意味論のアプローチをとると、アマリの語彙的な意味、構造に拠る意味、そして世界知識から補われる意味を区別でき、これまでの研究では統一的に説明できなかつたアマリの現象を説明できる。

4章は、本論文の中心であり、統語意味論を基にアマリの分析を行う。アマリには *Lexicon* において二種類の指定があると仮定し、構文ごとにその構造を考え、意味解釈を明らかにする。

最後に、5章で全体のまとめと考察を行う。

2. 先行研究

2.1. 新藤 (1983)

新藤 (1983) は、アマリを英語の *negative polarity item (NPI)* と関連させて分析している。新藤 (1983) によると、英語の *NPI* は、原則として否定要素と同じ節内にしか生じないより制限が強いものと、上位の節の否定要素をも範囲とする、より制限が弱いものとの二種類がある。一方、日本語の *NPI* は、一般的に制限の強い *NPI* である。たとえば、(2) のような *NPI* は、(3) に入れると非文となる。

- (2) 一銭も、少しも、ちっとも、全然、全く、決して、めったに、ほとんど、ろくに、たいして、少ししか、……………

[新藤 1983: 101, (7)]

- (3) *金が{ }欲しくてやったのではない。

[cf. 新藤 1983: 102, (11)]

そこでアマリを見てみると、新藤 (1983) は、アマリは他の日本語の *NPI* と違って、節の境界をまたいで否定語と結びつくことができることを指摘している。

- (4) [妊婦があまり体を動かす]のはよくない。

[新藤 1983: 102, (19)]

そのため一見、アマリは一般的な日本語の *NPI* とは異なる働きをするように見えるが、新藤(1983)は、同一節内で否定語と共起しているアマリをアマリ B と呼び、それを *NPI* であるとし、同一節内において否定語と共起していないアマリをアマリ A と呼び、それを *NPI* ではないと分析している。

新藤 (1983) は、アマリ A には「度を過ぎて」といった否定的なニュアンスが

あるため、それに続く部分も否定的な意味合いを持っていなければ意味的に矛盾が生じることがあると述べている。

- (5) a. *妊婦が**あまり**体を動かすのはよいことだ。
b. *金を**あまり**持っている人は大好きだ。
c. *あの人は金を**あまり**持っているので好感がもてる。

[新藤 1983: 105, (35)-(37)]

しかし、以下の例が示すように、アマリ A は必ずしも文中に否定の意味を表す語が必要なわけではない。

- (6) 教授の話が**あまり**面白かったので、学生は {皆笑いこけていた。
/熱心に聞き入っていた。}

[cf. 新藤 1983: 107, (45)]

さらに新藤 (1983)は、アマリ A は、「あまり～だ」というところまでで完結した命題内容を表すことができにくく、「あまり～だとこれこれだ」という、その後続する部分が必要なため、主文には生じにくいと述べている。これは、(7b)のような場合である。

- (7) a. 妊婦が**あまり**酒を飲むのはよくない。
b. *あの妊婦は**あまり**酒を飲んでいる。 [新藤 1983: 107, (47)]

次に、アマリ A には(8)の制約もあるとしている。

- (8) 「あまり A」は、表している内容が事実であるという合意がある節には生じにくい。 [新藤 1983: 108, (57)]

これは、(9b) (10b)のような場合である。

- (9) a. みそ汁を**あまり**飲むのは血压によくない。
b. ??今から考えてみれば、みそ汁を**あまり**飲んだのは血压によくなかった。 [新藤 1983: 108, (54)]

- (10) a. **あまり**空気が悪い所に住むのは遠慮させていただきたい。
b. ??**あまり**空気が悪いあの町に住むのは遠慮させていただきたい。

[新藤 1983: 108, (60)]

2.2. 須賀 (1992)

須賀 (1992)は、アマリは程度副詞であるとし、アマリの意味する程度評価と否定との関わりに注目して、アマリの特性について考察している。この研究によると、否定と呼応するアマリ～ナイは、「程度が甚だしくないこと」や「一般の程度を超えるほど」ではないということを表す場合と「ひかえめな否定」や「十分には肯定できないということに重点がある」ことを表す場合とがあり、前者の場合は程度性に注目しており、後者の場合は肯否判定に注目していると述べられている。

- (11) 「あの店のケーキ、おいしかった？」
「いや、この間食べてみたけれど、**あまり**おいしくなかったよ。」

[須賀 1992: 35, (1)]

(11)は、程度性に注目した解釈も肯否判定に注目した解釈もできる。一方、(12)では、肯否判定の意味しか生じない。

- (12) 私の部屋は木の陰になっていて、**あまり**日が当たらない。

[須賀 1992: 35, (2)]

これは、先行する節が日の当たり方が通常のあり方以下であることを表しているため、「程度が甚だしくないこと」や「一般の程度を超えるほど」ではないという意味が許されないからである。

須賀 (1992)によると、アマリはもともと(13)のように否定と呼応せず、評価・判定を意味する副詞として機能しており、現代の否定と呼応するアマリは、このようなアマリが変化し、通常の程度に達しないという意味を表すものとなったと論じている。

- (13) a. 只の恨では**あまり**俗である（『草枕』）
b. この蓋は**あまり**安っぽい様だな（『草枕』）

[cf. 須賀 1992: 37, (10) (11)]

そして以前からの評価・判定だけを表す意味は、現代においてアマリニ（アマリニモ）が担っているとしている。

- (14) a. その内容たるや**あまりにも**荒唐無稽な代物である。（『月刊 Asahi』一九八九. 七） [須賀 1992: 39, (14)]
b. ウェートリフティングの世界が**あまりに**ドラッグに汚染されていることを憂慮し（同） [須賀 1992: 40 (15)]

さらに、須賀 (1992)では、否定と呼応しないアマリについて述べている新藤 (1983)の(8)の制約は必ずしも適用されるわけではないとし、(15)のように述べている。

- (15) 否定と呼応しない「あまり」は、その事態が事実か否かではなく、仮定条件や確定条件を表す節の中で、主文で述べる事態の原因・理由を表す場合において許されている。 [須賀 1992: 41]

- (16) a. この品物は、**あまり**高いので売れないだろう。
b. *この品物は、**あまり**高いけれど売れるだろう。

[cf. 須賀 1992: 41, (23)]

- (17) a. この道は車が**あまり**通るので、すぐに舗装が痛んでしまう。
b. ?この道は車が**あまり**通るので、子供を遊ばせないほうがいい。

[cf. 須賀 1992: 41, (24)]

(16a) (17a)は、アマリが主文で述べる事態の原因となっているのに対して、(16b)は原因を表していないために非文となり、(17b)はアマリが原因ではなく主張の根拠となっているために容認度が低くなっている。

最後に、須賀 (1992)では、アマリをアンマリと比べ、主文における容認度の違いについても(18)のように考察し、(19)の例を挙げている。

- (18) 「あまり」は、主文の中で肯定述語を修飾するために用いること

はできない。しかし、「あんまり」はそれが通常の範囲を越えていること、度を越した状態であるということが示されているならば、主文において使用しても許容される度合いは高まる。

[須賀 1992: 44]

- (19) a. ×言うべきでないことまで言ってしまうなんて、太郎は**あまり**正直だ。
b. ?言うべきでないことまで言ってしまうなんて、太郎は**あんまり**正直だ。 [cf. 須賀 1992: 44 (30)]

2.3. 服部 (1993)

服部 (1993)では、副詞アマリが「否定と呼応」するものを弱否定型、何らかの程度を超えることを表すものを過度型の用法と呼んでいる。下の(20)は弱否定型の例であり、(21)は過度型の例である。

- (20) a. これは**あまり**美しくない。 [cf. 服部 1993: 1 (1)]
b. **あまり**上手にできなかった。 [cf. 服部 1993: 1 (2)]
- (21) a. **あまり**飲むと体に悪い。 [服部 1993: 2 (5)]
b. **あまり**面白いので三回も読んだ。 [服部 1993: 2 (6)]

そして、弱否定型のアマリには(22)のような条件があるとしている。

- (22) 弱否定型のアマリ～ナイは、正方向とみなされる方向に向かっ
ての程度が比較的大きくないことを表す。 [cf. 服部 1993: 9]

(23)(24)は、弱否定型のアマリを意味の似ているソウと比べ、アマリが正方向に向かっ
ての程度が比較的大きくないことを表すものであることを示している。

- (23) a. これは{**そう・あまり**}大きくない。 [服部 1993: 6 (29)]
b. これは{**そう・?あまり**}小さくない。 [服部 1993: 7 (30)]
- (24) a. この犬は{**そう・あまり**}利口ではない。 [服部 1993: 7 (35)]
b. この犬は{**そう・?あまり**}馬鹿ではない。 [服部 1993: 7 (36)]

次の「難しい」と「易しい」では、「難度」とは言えても「易度」とは言えないように、「難しい」が正方向であると考えられる。しかし、どちらとも「アマリ P ナイ」の形をとることができる。

- (25) a. この問題は {**そう・あまり**} 難しくない。
b. この問題は {**そう・あまり**} 易しくない。

[服部 1993: 7 (37) (38)]

服部(1993)によると、これは、「易しい」という本来負方向の尺度が、望ましさと結びついているからであり、その場合には、臨時に正方向と解釈されるからである。また、服部 (1993)によると、連体修飾節内や、補文内でも「アマリ P ナイ」という形をとる場合がある。

- (26) a. ちょっとどこかに触ったら、ベタッとくっついてしまって、そのまま黒焼きが出来そうで、 [**あまり**気分のいい風呂場風景で] はなかった。(山歩き) [服部 1993: 10, (61)]

- b. 私はここでの絵葉書向きなまとまりのいい景色を何度見ても、 [**あまり**心を動かされた] ことはない。(山歩き)

[服部 1993: 10, (63)]

一方、過度型のアマリについては、(27)のような条件があるとしている。

- (27) a. 「あまり p」がそれ自体、望ましくなく、除去や回避すべきであることを表す文（禁止など）に用いられる。
b. p が過度であることによって、望ましくない、または、通常と異なる事柄が生じる（生じた）ことを表す場合に用いられる。

(27)について示したものが(28)の例文である。

- (28) a. **あまり**飲むと体に悪い。 [服部 1993: 12 (74)]
b. **あまり**上手で驚いた。 [服部 1993: 14 (101)]
c. しばらくの間、**あまり**歩き回らないほうが良い。 [服部 1993: 15 (106)]
d. ?**あまり**熱くても大丈夫です。 [服部 1993: 13 (88)]
e. ?**あまり**面白ければ、熱心に聞きます。 [服部 1993: 15 (102)]

f. ?太郎は**あんまり**騒ぐ。 [服部 1993: 16 (114)]

そして、アマリは、同じ過度型であるアマリニやアマリニモとも使用条件が異なっていることを指摘している。

- (29) a. これは{?あまり・あまりにも・あまりに}美しい。
b. 何十個も食べた。{?あまり・あまりに・あまりにも}うまかった。
[服部 1993: 17 (119)-(120)]

さらに服部 (1993)は、アマリを用いた文が、特定の文脈で弱否定型と過度型のどちらにも解釈できる場合があると言及している。(30)は、漠然と甘さの度合いが大きくないのが好きだという解釈も、甘さの度合いが過度ではないのが好きだという解釈もできる。

(30) **あんまり**甘くないのが好きだ。 [服部 1993: 3 (11)]

また服部 (1993)は、アマリは過度型から弱否定型へと発展したと述べている。

- (31) 本来過度を表す「あまり」が、否定と結び付いた場合に弱化して、漠然と程度が大きくないことを表す表現として慣習的に用いられるに至ったものと考えられる。 [服部 1993: 19]

服部 (1993)は、補説として「あまりのN」、「Nのあまり」、「Vあまり」についても述べている。「あまりのN」の特徴についてまとめると、(32)のようになる。

- (32) a. 名詞類を修飾する「あまりの」は、意味的には、ここでいう過度型に対応する用法のみを持つ。
b. 実例では「あまりのNに+述語」の形がほとんどである。述語は、ある対象に関してのN (又はNの一性質) の度合いが、主体が平常の状態に対処しうる限度を超えたために自然に生じた特別な反応を表すものがほとんどである。 [服部 1993: 19]

次に「Nのあまり+述語(句)」の特徴については、(33)のようにまとめられる。

- (33) a. Nは述語の主体（通常人間ないしこれに準ずる活動主体）の性情を表すものに限られる。
- b. Nの度合が過度であることにより主体が通常と異なる行為や状態をとるに到ることを示す。实例では、人間の心的・感覚的状态や「過勞」のような身体の状態を表すものが極めて多い。
[服部 1993: 21]
- c. 他に、人間や団体などの活動体の継続的な態度・方針などを表す名詞の例がある。
[服部 1993: 22]

(33a)によって、(34a)(34b)のような違いが生じている。

- (34) a. (相手の) **あまり**の強さに驚いた。 [服部 1993: 21 (139)]
- b. ? (相手の) 強さの**あまり**驚いた。 [服部 1993: 21 (140)]

(35)は(33b)に関する例文である。

- (35) 逮捕された3人が今春卒業した中学校の校長は26日朝、「驚きの**あまり**言葉がない。被害者の方に対しておわびのしようがない」と肩を落とした。(朝日 89.4.26) [服部 1993: 21 (141)]

(36)は(33c)に関する例文である。

- (36) かつての思想重視の**あまり**物質面を抑制しすぎて人びとのやる気をつぶしたことへの反省から、豊かになるためには、と多少手綱を緩めたのは確か。(朝日 89.9.27) [服部 1993: 22 (145)]

最後に、「動詞句（動詞はル形）＋あまり～」の特徴についてまとめると(37)のようになり、(38)の例が挙げられる。

- (37) a. 同一主体に関して動詞句の表す事柄が過度であることが後続の動作や状態をひき起こすことを表すが、後続の動作や状態は望ましくない事柄にほぼ限られるようである。
b. 動詞句は「意志感情を表す動詞であるのが普通」である。

[服部 1993: 22]

- (38) 時代の流れは物の豊かさを追求する**あまり**、何か大事なものをわすれてきてはいないだろうか。(朝日 89.8.6)

[服部 1993: 22 (149)]

2.4. 先行研究のまとめ

以上、新藤 (1983)、須賀 (1992)、服部 (1993)の先行研究を概観した。岸本 (2010)、工藤 (1983)、久野 (1991)、日本語記述文法研究会 (2007)、飛田・浅田 (1994)、益岡・田窪 (2003)、森田 (1992)などの研究においても、細かな点では違いがあるものの、おおよそ、アマリには否定語と共起するものとしなないものがあるという点から、アマリの特性を記述している。同時に、特定の文脈で弱否定型と過度型の二つの解釈が可能となり、結果的にその両者の区別がしにくくなる場合があるということを報告している。アマリの特性は、それを記述するだけでも容易ではなくかなり複雑であるが、先行研究はアマリの本質を明らかにしようとするものではない。本論文では、このアマリの特性について統一的な説明をし、アマリの本質について明らかにすることを試みる。

3. 本論文のアプローチ

3.1. 本論文の課題

言語研究における一つの立場として、ある言語表現の意味を網羅的に記述することを目指す立場がある。ここまで紹介してきた新藤 (1983)、須賀 (1992)、服部 (1993)はこの研究方針に沿ったものであると言える。別の立場として、ある言語表現の意味は、人間の心的能力の相互作用の産物であると考え、それらの意味がどのように生み出されたのかを明らかにしようとする立場がある。この立場では、心的能力のモデルを構築することが目標となっている。この立場をとっているのが、本論文のアマリの分析で中心とする、**統語意味論**と呼ばれるアプローチである。

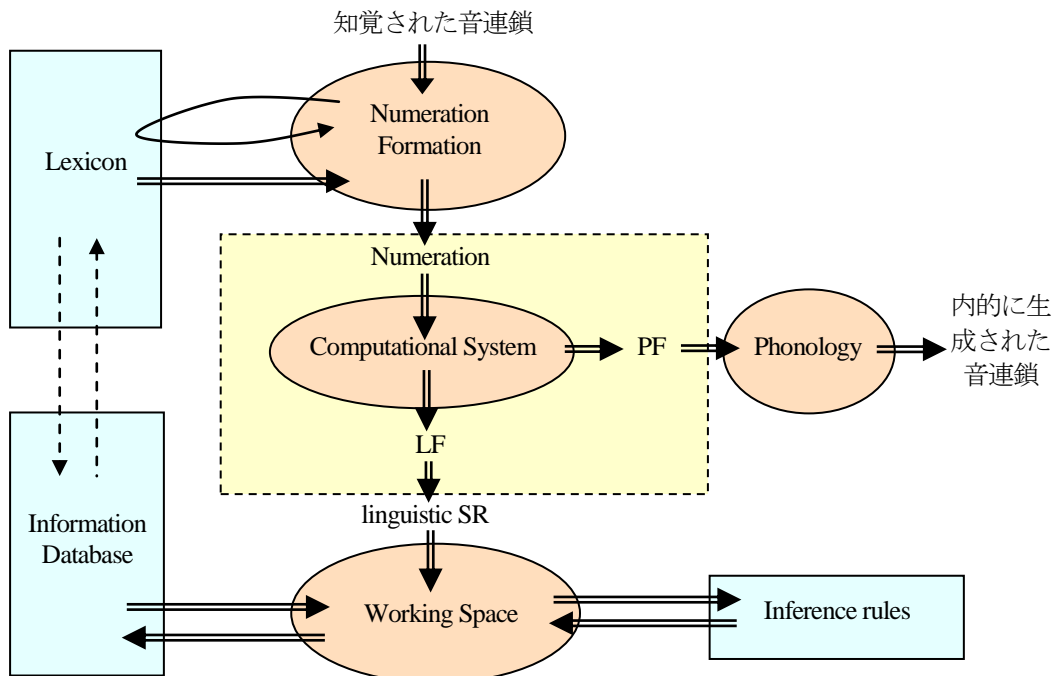
本論文は、アマリの多様な意味を生み出すモデルを提示することが目的である。これらの先行研究で述べられている一般化が正しくないということを論じ

るものではない。むしろ彼らの観察や一般化を基にして、統語意味論の枠組みから、アマリの多様な意味がどのように生まれるのかということの説明できるモデルを提示するものである。

3.2. 統語意味論

統語意味論とは、上山(2008a,b,c, 2011, 2013 等)で提案されている考え方である。その基本的な前提は、私たちがことばにふれたときに理解する「意味」というものは、「ことばそのものが表示する情報部分=(A)」と、「(A)に基づいて私たちが世界知識から補う部分=(B)」とから成っているということである。(A) (=ことばそのものが表示する情報) の表示は「linguistic SR」と呼び、(B) (= (A)に基づいて私たちが世界知識から補う部分) の表示を「理解後の SR」として区別して考える。統語意味論の目標は、linguistic SR の生まれる仕組み、すなわち、各語彙についての指定が、構造によってどのように変容を受けるか、そのシステムを明らかにすることである。本論文では、この考え方に基づき、アマリが単独ではどのような意味を表し、それが他の語彙と組み合わせられることによって、どのように文全体の意味に関与するかを明らかにしたい。このような文理解の流れを表す図である(39)を上山 (2013)より示す。

(39) 文理解の流れ



上山 (2013, (2))

3.3. 知識データベース

統語意味論では、個々人の頭の中に、その人の知っているあらゆる人物やものや出来事などの集合が「知識」として存在し、ことばそのものの意味(linguistic SR)とその「知識」とが相互作用をした結果、最終的な意味理解が生じると仮定されている。そのため、言語使用者の頭の中には、その「知識データベース」(=Information Database) が存在していると考えられる。この知識データベース中にあるモノやコト一般をオブジェクトと呼ぶこととする。上山(2011 等)にならって、オブジェクトを「 O_n 」とし、そのオブジェクトがモノの場合には「 X_n 」という形式で、コトの場合には「 E_n 」という形式で区別する。オブジェクトには指標番号 n が付き、同じオブジェクトであれば同じ指標番号を、異なるオブジェクトであれば異なる指標番号を持つ。そして一つ一つのオブジェクトの特性は、項目名(attribute)とその値(value)のペアという形で記述されていると考える。(40)は、ある人の知識データベースに存在する、あるオブジェクト X_{121} である。オブジェクトの特性は、左側に項目名、右側にその値という形の列挙で表す。

(40) X_{121} [名称: メアリ; 年齢: 25; 性別: 女; 職業: 高校教師; ...]

ある人の知識データベース中に(40)の X_{121} というオブジェクトがあるということは、その人が、「名前がメアリで、年齢が 25 歳で、高校教師をしている人」(X_{121}) が存在すると思っているということである。

(41) E_{366} [類: 落とす ; 対象: X_{252} ; 行為者: X_{121} ; ...]

また、(41)は、ある人の知識データベースに存在する、あるオブジェクト E_{366} である。(41)の E_{366} というオブジェクトがあるということは、どこかの時点で X_{121} というオブジェクト (つまり、そのメアリ) が X_{252} というオブジェクトに対して、「落とす」という語で表現可能な行為を行ったと、その人が思っているということになる。

3.4. SR 式の三つのタイプ

統語意味論では、一つ一つの語が断片的な情報を持っていると考え、それらの断片的な情報が知識データベースに働きかけて、新しい知識状態を生み出すと考えている。その「断片的な情報」を表すものは「SR 式」と呼ばれている。つまり、linguistic SR は単一の式ではなく、たとえば、ある文が 10 個の語から構成されているとすれば原則的に 10 個の SR 式の集合である。そして、それぞ

れが知識データベースに働きかけ、世界知識から情報を補い最終的な SR を生み出すと考えている。

SR 式はすべて、知識データベースと関わることによって、その役割を果たす。SR 式には linguistic SR と知識データベースにあるオブジェクトを関連付ける「指示する(Select)」働きと、知識データベースにある特定のオブジェクトに対して情報を追加する「記述する(Update)」働きの二種類があると仮定されている。そして、SR 式には三つのタイプがあり、それぞれのタイプごとにどのような働きを持つかが決まっているとする。SR 式の三つのタイプを以下に示す。知識データベース中にあるオブジェクトは大文字で表記するが、SR 式自体はあるオブジェクトの断片的な情報を表すものであり、オブジェクトではないため、 x_1, x_2 のように小文字で表記して区別する。

まず、o 型の言語表現 α_n とは、特定のオブジェクトを指示する働き(Select 機能)を持ち、 α がその何らかの項目名についての「値」に対応するものである。o 型の言語表現 α_n が対応する SR 式は、「 o_n [項目名: α]」という形式になる。o 型になる語彙には、(42)の「学生₁」や「食べる₂」などがある。

(42) o 型の例 :

- a. 「学生₁」 x_1 [類: 学生]
- b. 「食べる₂」 e_2 [類: 食べる; Theme: ____; Agent: ____]

ここで、「食べる₂」には、「誰かが何かを食べる」といった Theme や Agent が存在すると考えられるため、「食べる₂」の SR 式は、その意味役割までを含むものとなる。また「食べる₂」だけでは、一見特定のオブジェクトを指示する働きを持たないように見えるが、ここでは、「食べる₂」という表現で、「食べる₂」と記述できるイベント/出来事を指示していると仮定する。

次に、v 型の言語表現 $\alpha_n(O)$ は、あるオブジェクトの何らかの項目名についての値(value)を指示する働き(Select 機能)を持ち、 α が「項目名」に対応するものである。v 型の言語表現 $\alpha_n(O)$ に対応する SR 式は、「 $v_n = \alpha(O)$ 」という形式になる。どのオブジェクトについて述べているか、すなわち見出しオブジェクトは、構造的ではなく文脈的に決定される。見出しオブジェクトが文脈的に決定されるということは、見出しオブジェクトは linguistic SR を派生する際に決定されるわけではなく、派生された linguistic SR に基づいて、私たちが世界知識から情報を補う作業によって決定されるということである。そのため、見出しオブジェクトが何かということは、linguistic SR に含まれることではない。よって、言語表現 $\alpha_n(O)$ や「 $v_n = \alpha(O)$ 」の(O)には指標番号はつかず、X (モノ) か

E (コト) のどちらかが指定されるだけとなる。v型になる語彙には(43)のようなものがある。

(43) v型の例：

- a. 「年齢₃(X)」 $v_3 = \text{年齢}(X)$
- b. 「住所₄(X)」 $v_4 = \text{住所}(X)$
- c. 「原因₅(E)」 $v_5 = \text{原因}(E)$

最後に、p型の言語表現 α_{U_n} は、あるオブジェクトについて、その特性を記述する働き(Update 機能)を持ち、 α が「値」に対応する。(ある言語表現が Update 機能を持つ場合、指標番号の前に U を付けて表す。) p型の言語表現 α_{U_n} に対応する SR 式は、「[項目名()= α] $_{U_n}$ 」という形式になる。どのオブジェクトについて述べているか、すなわち、見出しオブジェクトは、構造的に決定される。見出しオブジェクトが構造的に決定されるということは、linguistic SR を派生する際に決定されるということである。「[項目名()= α] $_{U_n}$ 」のカッコに入るものが見出しオブジェクトである。これは、linguistic SR が派生された後、文脈的に見出しオブジェクトが決定される v型とは異なる点である。この違いについては、3.5節でさらに説明する。p型になる語彙には(44)のようなものがある。

(44) p型の例：

- a. 「美しい_{U5}」 [___()=美しい] $_{U5}$
- b. 「すごい_{U6}」 [___()=すごい] $_{U6}$

それぞれ、どのような項目名 (attribute) について、「美しい」「すごい」と記述されているか(表記の下線部分)は、linguistic SR では示されない。項目名は、linguistic SR を派生する際に決定されるわけではなく、派生された linguistic SR に基づいて、私たちが世界知識から補う作業によって決定されるからである。

SR 式の働きの一つである Select 機能について、o型の SR 式を持つ語を例に挙げ説明する。以下は、o型の SR 式と知識データベースにあるオブジェクトが o型の持つ Select 機能によって関連付けられる過程である。まず、ある人の頭の中に「メアリ₁」という語が入力されたとする。すると、(45)のような o型の SR 式が派生される。

(45) x_1 [名称: メアリ]

(45)の SR 式が、ことばそのものが表示する情報部分 (linguistic SR) である。そして、o 型である(45)は指示する(Select)働きを持っているため、その人の知識データベースから、この SR 式と矛盾しないオブジェクトを探し当てる。たとえば、知識データベース中に(46)のオブジェクトがあるとする。

(46) X_{121} [名称: メアリ; 年齢: 25; 性別: 女; 職業: 高校教師; ...]

すると(46)を探し当て、(45)を(46)と同定する。

(47) $x_1 = X_{121}$

このようなオブジェクトを探し当て同定する作業は、linguistic SR を派生する際に決定されるわけではなく、派生された linguistic SR に基づいて私たちが世界知識から補う作業によって決定されるものである。その結果が理解後の SR となる。

3.5. linguistic SR の派生の仕方

どの語彙がどのタイプの SR 式に対応するかは、Lexicon においても定められているが、(39)の Computational System における構造構築の過程で、情報の一部が補われたり、変化を受けたりする。その Computational System における操作の一つとして、Merge という統語的な操作がある。語同士が Merge した後、LF において SR 式が読み取られ、linguistic SR が派生される。linguistic SR が派生された後、3.3.節で説明したように、linguistic SR と知識データベース (Information Database) とが相互作用をした結果、最終的な意味理解が生じると仮定している。以下では、上山 (2013)等に従い、二つの語が Merge している場合に LF から派生される SR 式がどのように変容され、linguistic SR が派生されるかを具体的に見ていく。

3.5.1. o 型と o 型

たとえば、「ジョン₁」「かばん₂」という語はどちらも本来 o 型の語である。

(48) x_1 [名称: ジョン]

(49) x_2 [類: かばん]

この二つの語が Merge すると、たとえば(50)のような構造ができる。Merge 後

の LF における主要部を太線で示すこととする。

(50) a. ジョン₁のかばん₂

b. LF



この場合の linguistic SR は、次のように仮定されている。

(51) x_1 [名称: ジョン]

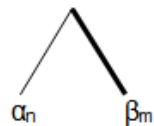
x_2 [類: かばん] | x_1

この「|」という記号は、その左側にあらわれているオブジェクトが右側にあらわれているオブジェクトに何らかの意味で関係を持っているということを表している。つまり、o 型の語同士が Merge しているとき、linguistic SR では、その二つの語の関係性は明示されていないと上山(2013)等では仮定されている。

「ジョンのかばん」と言っても、たとえば、「ジョンが所有しているかばん」としても、「誰かがジョンからもらったかばん」としても解釈でき、幅広い解釈が可能だということである。もう少し一般的に書くと次のようになる。

(52) α も β も o 型の語彙の場合

a. LF



b. linguistic SR

o_n [--- : α]

o_m [--- : β] | o_n

3.5.2. p 型と o 型

たとえば、「かわいい_{U1}」という語は p 型の語であり、「子供₂」という語は o 型の語である。

(53) [___ () = かわいい]_{U1}

(54) x_2 [類: 子供]

この二つの語が Merge すると、たとえば(55b)のような構造ができる。

(55) a. かわいい_{U1} 子供₂

b. LF



この場合の linguistic SR は次のように仮定されている。

(56) [___(x₂) = かわいい]_{U1}

x₂ [類: 子供]

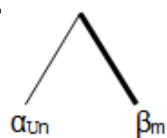
p 型の語と o 型の語が Merge する場合は、o 型の語同士の Merge の場合とは異なり、二つの語の関係性は構造的に決まっていると上山(2013)等では仮定されている。p 型の語には LF において、次のような規則があると考えられる。

(57) p 型の語は、主要部である Merge している相手から見出しオブジェクトを探し出し、決定する。

つまり、(55)の場合、(53)の見出しオブジェクトが x₂ (=子供) に固定されるのである。もう少し一般的に書くと次のようになる。

(58) α が p 型で、β が o 型の語彙の場合

a. LF



b. linguistic SR

[___(o_m) = α]_{U1}

o_m [--- : β]

このように p 型の SR 式では見出しオブジェクトが構造的に決定され、LF において、(59)のような制約が仮定されている。

(59) 見出しオブジェクトが決定していない p 型の SR 式は、不適格 (ill-formed) である。

(58)においては、o 型の語彙が主要部として Merge しているが、逆に、p 型の

語彙が主要部として Merge した場合には、(57)の規則が適用できず、p 型の SR 式の見出しオブジェクトを決定することができない。そのため、不適格な SR 式が派生することになる。実際、(60)の表現は容認可能であるが、(61)の語順では解釈ができない。

- (60) a. 特大_{U1}の皿₂
 b. 突然_{U1}の大雨₂
 c. 上々_{U1}の出来₂
 d. 木製_{U1}の椅子₂
 e. フロリダ産_{U1}のオレンジ₂ [cf. 上山 2013: 2,2 節]

- (61) a. *皿₁の特大_{U2}
 b. *大雨₁の突然_{U2}
 c. *出来₁の上々_{U2}
 d. *椅子₁の木製_{U2}
 e. *オレンジ₁のフロリダ産_{U2} [cf. 上山 2013: 2,2 節]

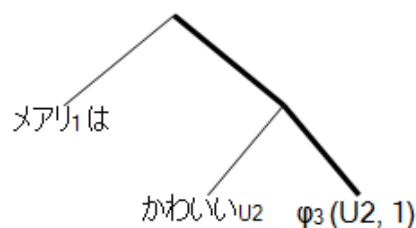
この例では、形態的には名詞が名詞を修飾しているのですが、この制限は、形態的な理由では説明のできないものである。

また(55a)や(60)の構造は、修飾 (modification) 構造であるが、上山 (2013)等では、p 型の SR 式の見出しオブジェクトは、叙述 (Predication) 構造において決定される場合もあるとしている。これは、次のような例文の場合である。

- (62) メアリ₁はかわいい_{U2}。

「メアリはかわいい」というとき、「メアリ₁」は o 型、「かわいい_{U2}」は p 型の表現である。しかしこのまま Merge すると、p 型が主要部となるため、(57)の規則が適用されず、見出しオブジェクトを決定することができない。そして、(59)の制限によって不適格となってしまう。そこで、上山(2013)等は、叙述関係を作る機能範疇が別にあり、(62)の構造は(63)であると考えた。

- (63) LF



「 $\phi_3(U2, 1)$ 」が叙述関係を作る機能範疇である。機能範疇は二つの slot を持っており、最初に Merge した相手の指標を 1 番目の slot に、次に Merge した相手の指標を二番目の slot に書き込むという指定を持った要素であるとする。上山 (2013)では仮定している。Predication の SR 式は、3.5.1節で導入した「|」という記号を用い、次のように表記できる。

(64) $[x_1 | U2]_3$

(64)は、 x_1 というオブジェクトと $U2$ の SR 式との間に Predication が成り立っていることを示している。よって、(63)の LF 表示から(65)のような SR 式に変換される。ここで、「かわいい $_{U2}$ 」の主要部が機能範疇であるため、その機能範疇自体が見出しオブジェクトにはなれない。そこで、(66)のように、代わりに主語である x_1 が「かわいい $_{U2}$ 」の SR 式の見出しオブジェクトとなるのである。(66)が(63)に対する linguistic SR である。

(65) x_1 [名称: メアリ]
 $[_ () = \text{かわいい}]_{U2}$
 $[x_1 | U2]_3$

(66) x_1 [名称: メアリ]
 $[_ (x_1) = \text{かわいい}]_{U2}$
 $[x_1 | U2]_3$

o 型と p 型の語の Predication は次のように一般化できる。

(67) a. LF

```

graph TD
    Root(( )) --- alpha_m[αm]
    Root --- Node1(( ))
    Node1 --- beta_U_n[βUn]
    Node1 --- phi_3["φ3(Un, m)"]
  
```

b. linguistic SR

o_m [--- : β]
 $[_ (o_m) = \alpha]_{U_n}$
 $[o_m | U_n]_k$

3.5.3. o型とv型

次にo型とv型の場合を見てみる。たとえば、「ジョン」は特定のオブジェクトを指示するo型の表現である。一方、「弟」は、特定のオブジェクトを指示してはいるが、あくまでも、別のオブジェクトを見出しオブジェクトとして初めて値が決まるものであるから「住所」や「年齢」などの表現と同じように、v型の語である。

(68) x_1 [名称: ジョン]

(69) $v_2 = \text{弟}(X)$

この二つの語が Merge すると、たとえば(70b)のような構造ができる。

(70) a. ジョン₁の弟₂(X)

b. LF



この場合の linguistic SR は、次のように仮定されている。

(71) x_1 [名称: ジョン]

$v_2 = \text{弟}(X) | x_1$

v型の語も、o型の語と同じく Select 機能を持つものなので、Update 機能を持つp型の場合とは異なり、二つの指示物間の関係は構造では決定されないと上山(2013)等では仮定されている。確かに、「ジョンの弟」という表現では、(72)のような解釈が最も普通であるが、(72)は(71)の linguistic SR を解釈した一つの結果にすぎず、(72)は linguistic SR とは区別する。

(72) x_1 [名称: ジョン]

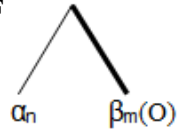
$v_2 = \text{弟}(x_1)$

これは、「ジョンの弟」という表現は、文脈によっては、「ジョンがある劇中で演じている弟役」という解釈や、「ジョンが世話係となっている（誰か別の人の）弟」という解釈も可能だからである。LF と linguistic SR の対応の仕方という点ではo型・v型という違いはあっても、o型とv型の Merge における linguistic SR(=(73))は、o型同士の Merge における linguistic SR(=(52))と本質的に

は異なる。

(73) α が o 型、 β が v 型の語彙の場合

a. LF



b. linguistic SR

o_n [--- : α]

$v_m = \beta(O) | o_n$

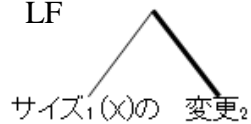
(73)では v 型が主要部となっているが、逆に o 型が主要部となっている場合にも特に違いはない¹。たとえば、「サイズ₁(X)」という v 型の語彙と「変更₂」という o 型の語彙が(76)のように Merge した場合、その linguistic SR は(77)のようになる。

(74) $v_1 = \text{サイズ}(X)$

(75) e_2 [類: 変更; Theme: ___; Agent: ___]

(76) a. サイズ₁(X)の変更₂

b. LF



(77) linguistic SR

$v_1 = \text{サイズ}(X)$

e_2 [類: 変更; Theme: ___; Agent: ___] | v_1

(77)を解釈した結果、(78)のような SR に至る場合もあるだろうが、これはあくまでも linguistic SR ではないとされている。

¹ ただし、「弟のジョン」という表現の場合には、「の」の働きが「ジョンの弟」の場合とは異なり、同格の機能を持っている。上山(2013)等では、同格の機能を持つ「の」を「の_U」とし、語彙の Select 機能を Update 機能に変容させる働きを持つと分析されている。この「の」の働きは、本論文の内容と直接の関係を持たないので、その議論は割愛する。

(78) e_2 [類: 変更; Theme: v_1 ; Agent: ___]

ただし、 v 型が主要部とならない場合、一つ制限が存在する。たとえば、 v 型の表現を用いた(79a)と、その値を具体的に記述した(79b)の間には、はっきりとした容認性の差が認められる。

- (79) a. *ページ数の本
b. 50 ページの本

(80)の例を見ても明らかのように、「ページ数」という v 型の語は、あるオブジェクトの「ページ数」の値を指示している。

- (80) 僕は空欄にその本のページ数を書き込んだ。
=僕は空欄に 50 ページと書き込んだ。

それにも関わらず、(79)の対立が見られるということは、次のような制約があると上山(2013)等は述べている。(76)-(77)の場合には、明らかに(81)には抵触していない。

- (81) v 型の語彙 $\beta_n(O)$ が o 型の語彙 α_m の領域内にある場合、 $\beta_n(O)$ の見出しオブジェクト(O)を o_m と同定してはならない。

3.5.4. p 型と v 型

3.5.3節で、 v 型が o 型を修飾する場合には、(81)の制約が適用するということを書いた。しかし、明らかに(82)の場合には、その制約が働いていないということがわかる。

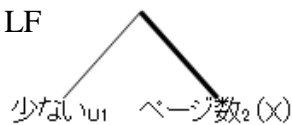
- (82) 少ないページ数の本

そこで上山(2013)等は、 p 型が v 型を修飾している場合、多少、不規則であるが、次のように linguistic SR が派生されると考えた。

- (83) [___ () = 少ない]_{U1}
(84) v_2 = ページ数(X)

(85) a. 少ない_{U1} ページ数_{2(X)}

b. LF



(86) linguistic SR

[ページ数(X)=少ない]_{U2}

通常は、二つの語彙が Merge している場合、SR 式も二つ派生されるが、この場合に限っては、一つの SR 式しか派生しないのである。これを一般的に書くと次のようになる。

(87) α が p 型、 β が v 型の語彙の場合

a. LF



b. linguistic SR

[$\beta(O)=\alpha$]_{U_m}

指標としては主要部である β のものを引き継いでいるが、SR の型式が p 型に変わっているとところが変則的である。

4. アマリの分析

本論文では、3 章で紹介した統語意味論のアプローチに基づき、先行研究とは異なる分析方法で、これまで明らかにされていなかったアマリの本質について説明するモデルを提案する。ここで、もう一度本論文で考察する問題を示しておく。

- (1) a. Lexicon には何種類のアマリが登録されており、それぞれどのような指定がされているのか。
- b. アマリと他の表現とがどのように組み合わせたり、どのような意味が生じるのか。

(1)で基盤となっている考え方は、アマリに関わる様々な制限には、まず、linguistic SR に関わるものと、それ以降の「理解」に関わる部分とがあること、

そして、linguistic SR に関わる問題には、Lexicon における指定のあり方に帰せられる部分と Merge などの構造構築に帰せられる部分とがあるということである。そこで、アマリが生起する構文ごとに、その特徴をあらためて記述し、その説明を提示していきたい。

- (88) a. アマリノ P ニ、 ...
 b. {アマリニ (モ) /アマリ (アンマリ) } P {ノデ/ト/ナラ...}、 ...
 c. P ノアマリ、 ...
 d. P アマリ、 ...
 e. アマリ P ナイ

(88b)については、先行研究では別々に記述をし、それらの相違点を挙げているものもあるが、本論文ではその意味解釈に共通性があるという点により注目しているため、以下ではこれらの表現が linguistic SR としては区別がないと仮定し、分析を進めていく。

4.1. o 型のアマリと p 型のアマリ

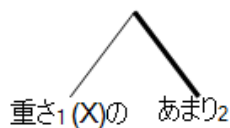
本論文では、アマリには Lexicon で二種類の指定があると考えたい。一つは o 型のアマリ、もう一つは p 型のアマリである。以下では、まずこれらの二種類の指定を持つアマリを含む文が、それぞれどのように解釈されるかを示す。

4.1.1. o 型のアマリ

(89a)の文は、o 型のアマリが関わる例である。

- (89) a. 重さ₁(X)のあまり₂、思わず体勢を崩しそうになった₃。

b.



(89a)の文では、v 型の語である「重さ₁(X)」と、o 型の語である「あまり₂」とが Merge し、(89b)のような LF になっている。(89a)の「重さ₁(X)」と「あまり₂」は、それぞれ、次のような SR 式に置き換えられるものである。

- (90) $v_1 = \text{重さ}(X)$
 (91) e_2 [類: あまり; Theme: ____]

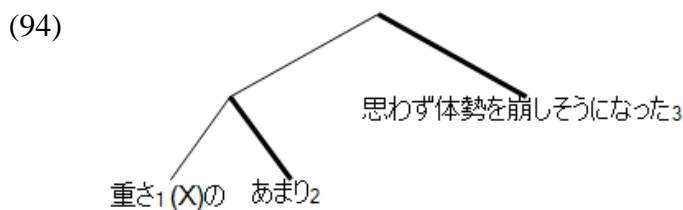
これは v 型の語が o 型の語を修飾している場合であるから、(89b)に対して次のような linguistic SR が派生されることになる。

- (92) v_1 =重さ(X)
 e_2 [類: あまり; Theme: ___] | v_1

このように「|」の左に空欄が含まれる場合は、「|」の右の要素が空欄に入っている次の SR 式によって解決されるのが普通である。

- (93) v_1 =重さ(X)
 e_2 [類: あまり; Theme: v_1]

(93)は、あるオブジェクト X の「重さ」が「あまる」（つまり、限度を超える）という出来事が起こったことを意味している。そして、その結果「思わず体勢を崩しそうになった」という行動につながったわけである。(89a)の文全体を LF で表すと、(94)のような構造になる。o 型のアマリは p 型の語と直接 Merge しても、適格な SR 式が出てくるので、必ずしも主語を必要としない。



このように、o 型のアマリは、「何かの度合いが話者の基準値を越えた」という出来事を指示し、それが次の行動を引き起こす要因となっていることを表している²。

4.1.2. p 型のアマリ

(95a)の文は、p 型のアマリに関わる例である。

² 兼行 (2012: 3) では、「「X のあまり Y」は、X に起因して我慢ができずに Y してしまったというような、衝動性があり、冷静な判断を欠いた状態を表す。意外性や驚きも内包する。」としている。この分析は本論文の、アマリが o 型るとき、オブジェクト X の何かが限度を超え、その結果次の行動につながる、という意味解釈と同じ方向性の記述であると考えられる。

(95) a. あまり_{U1}の豪華さ_{2(X)}に_{U3}言葉を失った₄

b.



(95a)の文では、p型の語である「あまり_{U1}」と、v型の語である「豪華さ_{2(X)}」がMergeし、(95b)のようなLFになっている。「あまり_{U1}」と「豪華さ_{2(X)}」は、単独ならば、次のようなSR式に置き換えられる語である。

(96) [___()=あまり]_{U1}

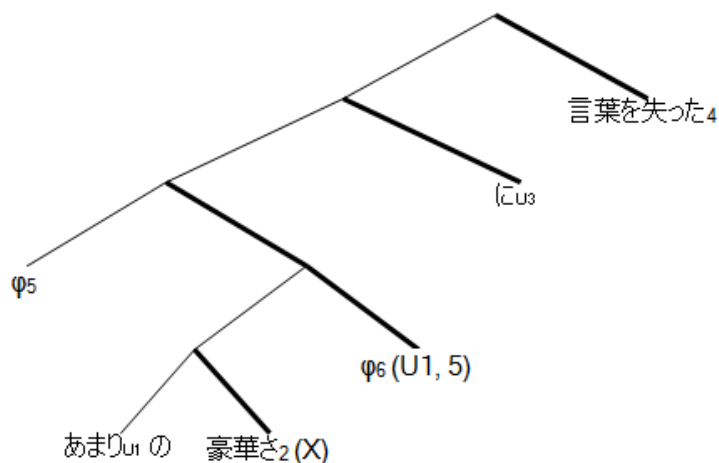
(97) v₂=豪華さ(X)

ただし、ここではp型の語がv型の語を修飾している場合であるから、3.5.4.節で述べたように、次のような一つのSR式が派生される。

(98) [豪華さ(X)=あまり]_{U1}

このSR式では、何らかのオブジェクトXの「豪華さ」の値が「あまり」という表現で記述されているが、これは、Xの「豪華さ」の度合いが話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている状態を表していると考えられる。(95a)では、それが理由となって「言葉を失った」ということが述べられている。そこで、(95a)の文全体をLFで表すと、(99)のような構造になる。

(99)



前提として、語彙がp型のとき、見出しオブジェクトは構造的に決定される。そのため、構造上に見出しオブジェクトとなる語が現れていなければならない。

(95a)にはそれがないため、空範疇 ϕ_5 を設ける。しかしこのままでは、「アマリ $_{U1}$ の豪華さ $_2(X)$ 」のSR式(=98)はp型であり、主要部であるため(57)の規則が適用せず、見出しオブジェクトを決定できずに不適格となる。そこで3.5.2節で触れたように、機能範疇 ϕ_6 によって ϕ_5 と(98)の間に、叙述関係(**Predication**)が成り立っているとす。この叙述関係に基づいて、 ϕ_5 が(98)の見出しオブジェクトに決定され、結果的に、 ϕ_5 が「アマリ $_{U1}$ の豪華さ $_2(X)$ 」である、という意味解釈が成立するのである。「に」という助詞は理由を表すと考え、 ϕ_6 の叙述関係全体が「言葉を失った」というコトの理由であると解釈される。服部(1993)は、この用法のアマリでは「に」を伴うことが圧倒的に多いが、(100)-(102)のように「に」以外の助詞を伴う場合もあると指摘している。しかし「に」以外の助詞であっても、解釈の仕方に問題はない。

(100) 日本一のツインビル「ゲートタワー」(高さ250メートル)の完成が、**あまり**の高層工事のため1993年春の開港に間に合わないことがほぼ確実になった。(朝日 89.9.22) [cf. 服部 1993: 20, (135)]

(101) 別のスナックでは、壁飾りなどが倒れたり、歌っていた客が**あまり**の揺れで、その場に座り込む姿も見られた。(朝日 89.7.7)
[cf. 服部 1993: 20, (136)]

(102) 政府・自民党の**あまり**の横暴さは、首相の交代で帳消しにできるものではないからである。(朝日 89.5.14)
[cf. 服部 1993: 21, (137)]

4.1.3. まとめ

4.1.1節、4.1.2節で見たように、本論文では、Lexiconにおいて、o型とp型の二種類のアマリを指定する。このことによって、アマリの様々な構文の特徴が統一的に説明できると共に、これまでの先行研究では焦点が当てられていなかったアマリの特性や現象の相違点についても明らかにできることを示す。以下、(88)の構文ごとに説明していく。

4.2. アマリノPニ、...

まず、「アマリノPニ、...」(=88a)の構文について、いくつかの例文をもとに、どのような意味解釈ができるかを明らかにする。

4.2.1. 現象の観察

「アマリノPニ、…」の構文は、次のような場合である。

- (103) a. **あまり**の楽しさに、時間を忘れた。
b. **あまり**の恐怖に、身震いした。
c. **あまり**の忙しさに、めまいがした。

4.2.2. 度合いを表す語との Merge

ここで、(104a)の例文を考察する。この文は、(95a)と同じ構文であり、アマリをp型のSR式を持つ語と考える。

- (104) a. あまり_{U1}の成績_{2(X)}に_{U3}、{飛び上がって喜んだ／がっくりと肩を落とした}_{4o}。



(104a)の文では、p型の語である「あまり_{U1}」と、v型の語である「成績_{2(X)}」がMergeし、(104b)のようなLFになっているとする。(104a)の「あまり_{U1}」と「成績_{2(X)}」は、単独ならば、次のSR式に置き換えられる語である。

(105) [___()=あまり]_{U1}

(106) v₂=成績(X)

(104a)は、p型の語がv型の語を修飾している場合であるから、次のような一つのSR式で、linguistic SRが派生される。

(107) [成績(X)=あまり]_{U1}

この意味解釈を考えると、Xの成績が話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っているという状態を表している。(104a)を見れば明らかなように、「あまりの成績」という表現は、その成績が「とても良い」場合にも「ひどく悪い」場合にも用いることができる。つまり、基準値を大きく上回っている状態とは、プラス方向だけでなくマイナス方向に対しても言える。その点で、(95a)とは大きく異なっている。(95a)では、「豪華さの程度があまりにも低くて、言葉葉を失った」という解釈は許されない。この違いは、「豪華さ」という項目名

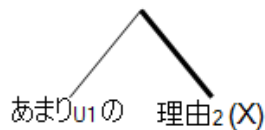
と「成績」という項目名の性質の違いとして考えるべきであろう。つまり、「豪華さ」という項目名でのスケールは、プラス方向にのみ伸びていくスケールであるのに対して、「成績」という項目名でのスケールは、プラス方向にもマイナス方向にも伸びていくスケールであり、だからこそ、(104a)のような両極端の用法が可能なのである。

4.2.3. 度合いを表さない語との Merge

続いて、(108)の例文を考察する。

(108) a. あまり_{U1}の理由₂(X)に_{U3}あきれた₄。

b.



「理由」という表現は、何らかの出来事に関する項目名に相当しており、したがってv型ではある。しかし、「理由」という項目名の値に相当するものは、「豪華さ」や「成績」、「感激」とは異なり、度合いを表すものではない。しかし、(108a)の意味を考えてみると、「理由」自体は度合いではないものの、文全体を見ると、その「理由」の長々しさ、分かりにくさ、非情さなどについて語っていることがわかる。すなわち、(108a)の linguistic SR も同様に考えればよい。Merge 後、単独ならば次のような SR 式に置き換えられる。

(109) [___()=あまり]_{U1}

(110) v₂=理由(X)

p型がv型を修飾しているため、次のような一つの SR 式が派生される。

(111) [理由(X)=あまり]_{U1}

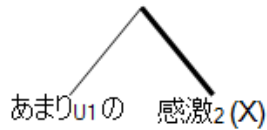
つまり、ある出来事 X に対する理由の長々しさ、分かりにくさ、非情さなどの度合いが話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている状態を表している。

4.2.4. SR 式が自明でない語との Merge

次に、(112a)の例文を考察する。

(112) a. あまり u_1 の感激 $_2(X)$ に u_3 、我を忘れた $_4$ 。

b.



「あまり u_1 」と「感激 $_2(X)$ 」が Merge し、(112b)の LF となる。単独では、「感激」がどの型の SR 式に対応するのか自明ではないが、同じ(88a)の構文に生起できることから、この場合も一種の感激の度合い、つまり、「何かの出来事 X に対する感激度」を表す v 型と考えてよいのではないだろうか。それぞれの語は、次のような SR 式に置き換えられるものである。

(113) [___ () =あまり] u_1

(114) v_2 =感激(X)

このとき、p 型の語が v 型の語を修飾している場合であるから、(115)の一つの SR 式が派生される。

(115) [感激(X) =あまり] u_1

つまり、ある出来事 X に対する感激度が話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っていることを表す。

4.2.5. まとめ

以上のように、「アマリノ P ニ、...」の構文では、アマリを p 型として分析するとすべてうまく説明できる。アマリと Merge する語はどれも v 型の言語表現であり、その語が度合いを持っている場合については、「P の度合いが話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている」という状態を表す。また、その語自体が度合いを持っていなければ、linguistic SR が派生された後、世界知識からどのような度合いであるかという情報が補われ、「P の何らかの度合いが話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている」という状態を表すのである。

4.3. {アマリニ (モ) /アマリ (アンマリ) } P {ノデ/ト/ナラ} …、…

次に、「{アマリニ (モ) /アマリ (アンマリ) } P {ノデ/ト/ナラ} …、…」(=(88b))の場合を考察する。

4.3.1. 現象の観察

この構文は以下の例文のように用いられる。

- (116) a. **あまりに**楽しかったので、時間を忘れた。
b. **あまりに**恐かったので、身震いした。
c. **あまりに**忙しかったので、めまいがした。
- (117) a. **あまりにも**楽しかったので、時間を忘れた。
b. **あまりにも**恐かったので、身震いした。
c. **あまりにも**忙しかったので、めまいがした。
- (118) a. **あまり**楽しかったので、時間を忘れた。
b. **あまり**恐かったので、身震いした。
c. **あまり**忙しかったので、めまいがした。
- (119) a. **あんまり**楽しかったので、時間を忘れた。
b. **あんまり**恐かったので、身震いした。
c. **あんまり**忙しかったので、めまいがした。

4.3.2. p 型の語との Merge

まず、(120a)の例文を考察する。

- (120) a. あまり u_1 にもおもしろい u_2 ので u_3 、二度も読んだ u_4 。
b.



(120a)は、アマリが「おもしろい」を修飾しており、(88a)の構文と同じように、アマリがある語を修飾するという関係になっている。そこで、(120a)のアマリの SR 式も(88a)と同様に p 型であると考ええる。

- (121) [___ () =あまり] u_1

次に、「おもしろい」の SR 式を考えてみると、「おもしろい」も、何かの程度が「おもしろい」と言えることから、p 型である。

(122) [___()=おもしろい]_{U2}

つまり、p 型の語が p 型の語を修飾するという関係になっている。しかし、p 型の語同士の Merge では、(57)の規則が適用できず、不適格となる。このことは、(59)の LF での制約からも言えるように、syntax として Merge が許されたとしても、それだけでは Merge 後の見出しオブジェクトを決められないからである。ここで、(57) (59)をもう一度示しておく。

(57) p 型の語は、主要部である Merge している相手から見出しオブジェクトを探し出し、決定する。

(59) 見出しオブジェクトが決定していない p 型の SR 式は、不適格 (ill-formed) である。

そこで p 型である「おもしろい」という語を、(88a)のあまりが修飾する語と同じ、v 型に変える規則を LF で仮定する。

(123) p 型のあまりと Merge する語が p 型の場合、その語は v 型の SR 式に変換される。

(122)にこの規則が適用し、(124)のように変換される。

(124) v₂=おもしろさ(X)

すると、次のような linguistic SR が派生される。

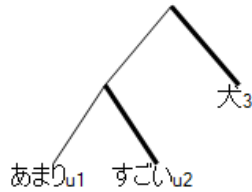
(125) [おもしろさ(X)=あまり]_{U1}

つまり、「X のおもしろさが話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている」ために「二度も読んだ」という意味解釈ができる。

次に(126)について考察する。

(126) a. あまり_{U1} すごい_{U2} 犬₃ を飼う₄ と_{U5}、目が離せなくなる₆。

b.



(126a)の意味を考えてみると、「あまりすごい」とは、その犬 (x_3) について、すごさが「話者の基準値を越え、それが基準値を大きく上回っている」という特性を述べていると解釈される。従って、この構文のアマリも p 型であると考えたい。しかし(126a)の「すごい」も p 型であるため、p 型のアマリと Merge しても SR 式がうまく派生されない。

(127) [___ ()=あまり]_{U1}

(128) x_3 [類: 犬]

(129) [___ ()=すごい]_{U2}

そこで、(123)の規則が適用し、(129)は(130)に変換される。

(130) v_2 =すごさ(X)

そして、最終的に(131)のような linguistic SR が派生される。

(131) x_3 [類: 犬]

[すごさ(X)=あまり]_{U1} | x_3

4.3.3. まとめ

以上のように、「{アマリニ (モ) /アマリ (アンマリ) } P {ノデ/ト/ナラ} …、…」の構文も、アマリは p 型として分析可能である。ただし、アマリが修飾する語が p 型のままでは Merge 語の SR 式がうまく派生されず容認されない。そのため、その語を p 型から v 型に変える規則を仮定し、p 型の語が v 型の語を修飾する場合と同様に、意味解釈を導くのである。

4.4. P ノアマリ、…

次に「P ノアマリ、…」(=(88c))の構文について考察する。

4.4.1. 現象の観察

この構文は(132)のように用いられる。

- (132) a. 楽しさの**あまり**、時間を忘れた。
- b. 恐怖の**あまり**、身震いした。
- c. 忙しさの**あまり**、めまいがした。

ここで、一見アマリと P を入れ替えただけのように見える「アマリノ P ニ、…」では容認可能なものが、「P ノアマリ、…」では容認できない場合があるということが、これらの構文の大きな特徴である。

- (133) a. **あまり**の楽しさに、時間を忘れた。
- b. 楽しさの**あまり**、時間を忘れた。

- (134) a. **あまり**の恐怖に、身震いした。
- b. 恐怖の**あまり**、身震いした。

- (135) a. **あまり**の忙しさに、めまいがした。
- b. 忙しさの**あまり**、めまいがした。

- (136) a. **あまり**の理由に、あきれた。
- b. *理由の**あまり**、あきれた。

- (137) a. **あまり**の方法に、驚いた。
- b. *方法の**あまり**、驚いた。

- (138) a. **あまり**のサイズに、二度見してしまった。
- b. *サイズの**あまり**、二度見してしまった。

- (139) a. **あまり**の年齢に、耳を疑った。
- b. *年齢の**あまり**、耳を疑った。

(133)-(135)はどちらとも容認可能な例、(136)-(139)は「P ノアマリ、…」では容認不可能な例である。以下では、Lexicon において二種類のアマリを指定することで、このような容認性の違いをうまく説明できることを主張し、その分析

を提示していく。

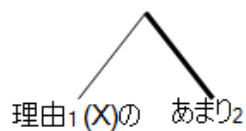
4.4.2. 度合いを持たない語との Merge

まず、(140a)の例文を見る。(140a)は明らかに容認不可能な例文である。一方、「あまりの理由に」と言った場合は容認可能であり、不自然さは全くない。一見、「理由」とアマリを入れ替えただけの構文に見えるが、このような現象から、アマリと Merge する語には何らかの制限があると考えられる。

(140) a. *理由₁(X)のあまり₂、あきれた₃。

cf. (108a) ^{ok}あまり_{U1}の理由₂(X)に_{U3}あきれた₄。

b.



(140a)の「理由₁(X)」は v 型の表現であるが、度合いは持っていない。「あまり₂」は、(89a)と同様に「何かの度合いが基準値を越えた」という出来事を指示する o 型の SR 式であると考えられる。これらは単独では、次のような SR 式で表される。

(141) $v_1 = \text{理由}(X)$

(142) e_2 [類: あまり; Theme: ____]

これまでのように「アマリノ P ニ」のアマリが p 型、「P ノアマリ」のアマリが o 型であるとする、度合いを持っていない v 型の表現 (= 理由₁(X)) は、p 型のアマリと Merge すると SR 式がうまく派生されるが、o 型のアマリと Merge すると SR 式がうまく派生されない、と考えれば説明できる。(143)も同様に、「方法₁(X)」は度合いを持たない v 型の表現であるため、o 型のアマリと Merge しても SR 式がうまく派生されないと考えられる。

(143) 方法₁(X)のあまり₂、驚いた₃。

cf. あまり_{U1}の方法₂(X)に₃、驚いた₄。

アマリを修飾する語が度合いを表さなければ「P ノアマリ、...」の構文が容認されないということは、その語の SR 式に関わらず言えることである。(144b)の「受賞した₁」と(145b)の「読書した₁」は、度合いを持たない o 型の表現である。

(144) a. *受賞₁(E)のあまり₂、飛び上がって喜んだ₃。

b. *受賞した₁あまり₂、飛び上がって喜んだ₃。

(145) a. *読書₁(E)のあまり₂、疲れ果てた₃。

b. *読書した₁あまり₂、疲れ果てた₃。

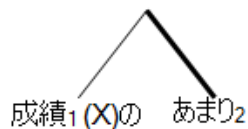
4.4.3. 両方向に度合いを持つ語との Merge

では、(146)はどのように説明できるだろうか。v 型の「成績₁(X)」は度合いを持つ表現であるが、それにも関わらず「P ノアマリ」では容認できない。

(146) a. *成績₁(X)のあまり₂、{飛び上がって喜んだ／がっくりと肩を落とした}₃。

cf. (104a) ^{OK}あまり_{U1}の成績₂(X)に_{U3}、{飛び上がって喜んだ／がっくりと肩を落とした}₄。

b.



これについては、(104a)の例文で指摘した、「あまりの成績」が非常に良い成績でも非常に悪い成績でも指示するという観察と関連づけて考えたい。すなわち、度合いを持つ語であっても、o 型のアマリが意味する「あふれて、何かの限界を越える」ためには、その値の変化の方向が一方向に固定されていなければならない。どちらの方向にも解釈できる語との Merge では、SR 式がうまく派生されず不適格となると考える。一方の p 型のアマリの場合、その必要性はないのではないだろうか。

(147)の例も同様に、v 型の「サイズ₁(X)」には、大きいサイズの場合も小さいサイズの場合もあり得る。また、(148)についても、v 型の「年齢₁(X)」には年齢が高い場合も低い場合もあり得る。どちらの方向からでも解釈が可能であり、度合いを表す方向が定まっていないからこそ、o 型のアマリとの Merge では、SR 式が派生されないのである。

(147) *サイズ₁(X)のあまり₂、二度見してしまった₃。

cf. あまり_{U1}のサイズ₂(X)に_{U3}、二度見してしまった₄。

- (148) 年齢₁(X)のあまり₂、耳を疑った₃。
 cf. アマリ₁の年齢₂(X)に₃、耳を疑った₄。

4.4.4. 容認性に個人差がある語との Merge

最後に、次の例文について考察する。

- (149) a. ? {驚愕₁(X)/落胆₁(X)} のあまり₂言葉が出なかった₃。

b.



(149a)の容認性には個人差があると思われるが、「驚愕」や「落胆」を、度合いを含むv型の表現と捉えることができれば、容認できると考えられる。

- (150) v₁=驚愕(X)/v₁=落胆(X)

- (151) e₂[類: あまり; Theme: ____]

これはv型の語がo型のアマリを修飾している場合であるから、次のようなlinguistic SRが派生される。

- (152) v₁=驚愕(X)/v₁=落胆(X)

- e₂[類: あまり; Theme: ____] | v₁

つまり、必ずしも驚愕した度合いや落胆した度合いが話者の基準値を大きく上回っているという状態に重点が置かれているわけではなく、ある対象Xの「驚愕度」や「落胆度」が話し手の中での何かの限度を超え、その結果、「言葉が出ない」という現象につながったということに重点が置かれているのである。

4.4.5. まとめ

以上のように、「Pノアマリ、…」の構文は、一方向への度合いを持つv型がo型のアマリを修飾していると考えることによって、意味解釈を説明できる。

4.5. Pアマリ、…

次に「Pアマリ、…」(=(88d))の構文について考察する。

4.5.1. 現象の観察

この構文は次のように用いられる。P が動詞である場合(=(153))と、形容詞である場合(=(154))とがある。

- (153) a. 驚いた**あまり**言葉を失った。
b. 慌てた**あまり**ミスを犯した。
c. 走り過ぎた**あまり**動けなくなった。
- (154) a. 暗い**あまり**何度もこけそうになった。
b. 服が白い**あまり**こぼしたスープの色が目立った。
c. 背が低い**あまり**手が届かない。

4.5.2. o 型の語との Merge

まず初めに、次の例文を分析する。

- (155) a. 集中する₁あまり₂、電車を乗り過ごしてしまった₃。

b.



(155a)の例文は、「集中する₁」という o 型の語があまりを修飾している。ある語があまりを修飾するという関係は、(88c)の構文と同じであるから、この場合のあまりも o 型であると考えられる。「集中する₁」と「あまり₂」の SR 式は、単独では次のようになる。

(156) e₁ [類: 集中する; Theme: ___ ; Agent: ___]

(157) e₂ [類: あまり; Theme: ___]

そして、これは o 型の語同士の Merge であるから、3.5.1.節で述べたように、次のような linguistic SR が派生される。

(158) e₁ [類: 集中する; Theme: ___ , Agent: ___]

e₂ [類: あまり; Theme: ___] | e₁

つまり、(155a)の文では、必ずしも集中する度合いが話者の基準値を上回っているという状態に重点が置かれているわけではなく、ある対象(Theme)に集中す

る度合いが話し手の中で限度を超え、その結果、思わず「電車を乗り過ごす」という結果につながったということである。「集中するあまり」は、「電車を乗り過ごしてしまった。」という用言に対する修飾部として働いているため、その行動を起こさせる要因として解釈されると考える。

4.5.3. p 型の語との Merge

次に、アマリが p 型の語と Merge する場合について考察する。

(159) a. 暗い_{U1} あまり₂ 何度もこけそうになった₃。

b.



(159a)の「暗い_{U1}」は p 型の表現であり、p 型の語がアマリを修飾している。ある語がアマリを修飾するという関係から、この場合のアマリも o 型であると考えられる。よって、「暗い_{U1}」と「あまり₂」の SR 式は、単独では次のようになる。

(160) [___ ()=暗い]_{U1}

(161) e₂ [類: あまり; Theme: ___]

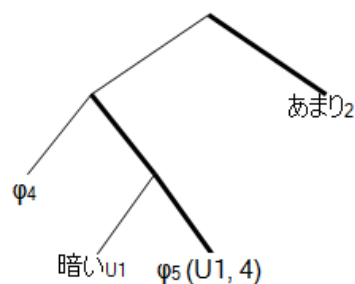
これは、p 型の語が o 型の語を修飾している場合であるから、次のような linguistic SR が派生されるはずである。

(162) [___ (e₂)=暗い]_{U1}

(163) e₂ [類: あまり; Theme: ___]

しかし、このような派生では、意味解釈が不明である。そこで、p 型の語と o 型のアマリが Merge する場合、何か(=φ₄)が「暗い_{U1}」という Predication が、φ₅という機能範疇によって成り立っていると仮定する。このときの LF を以下に示す。

(164)



このように仮定すると、 ϕ_5 の叙述関係全体がo型の「あまり₂」と Merge するため、「 ϕ_4 が暗いこと」の程度が、話し手の中で限度を超えたという意味解釈が可能となる。この Predication を表す linguistic SR が(165)である。

- (165) x_4 [類: ϕ]
[___(x_4)=暗い]_{U1}
[x_4 | U1]₅

次の二つの例文も同じように叙述関係全体がo型の「あまり₂」と Merge すると考えることで、解釈が可能となる。

- (166) 服₁が白い_{U2}あまり₃こぼしたスープの色が目立った_{4o}。
(167) 背₁が低い_{U2}あまり₃手が届かない_{4o}。

4.5.4. まとめ

以上のように、「P アマリ、...」の構文では、アマリはo型であると考えられる。この構文におけるp型の語とo型のアマリとの Merge では、linguistic SR がうまく派生されない。そこで、Predication を仮定し、それがo型のアマリと Merge すると考えることによって、意味解釈ができるのである。「P アマリ、...」の構文は、「P ノアマリ、...」と同様にo型であるから、linguistic SR がうまく派生されるためには、アマリと Merge する語は一方向に度合いを持たなければならないと考えられる。

4.6. アマリ P ナイ

次に「アマリ P ナイ」(=(88e))の構文について考察する。

4.6.1. 現象の観察

この構文は次のように用いられる。

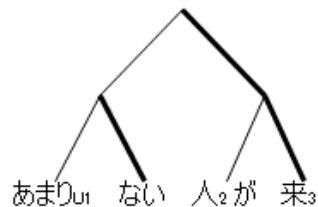
- (168) a. **あまり**ご飯を食べない。
b. **あまり**学校に来ない。
c. **あまり**字が濃くない。
d. **あまり**鮮やかでない。

4.6.2. 「アマリ P ナイ」の分析

初めに(169)の例文を分析する。

(169) a. あまり u_1 人 $_2$ が来 $_3$ ない。

b.



(169a)の「あまり人が来ない」とは、「来る人数が話者の基準値を上回っているわけではない」という意味ではなく、「来る人数が話者の基準値を下回っている」という意味である。本論文ではここまで、アマリには **Lexicon** に **o** 型と **p** 型の二種類があることを主張してきた。「アマリ P ナイ」の構文では、アマリを **p** 型と考える。そして、**p** 型のアマリが同じ節内に否定語を伴う場合、その否定語と **Merge** し、**LF** でアマリ～ナイという形になると考えたい³。アマリと否定語のナイが **Merge** することで、その意味も「何かの度合いが話者の基準値を上回っている」状態から、「何かの度合いが話者の目安値を下回っている」という状態を記述するものとなるとする。そこで、(169a)の **LF** は、(169b)のようになる。**o** 型である「人₂」と、同じく **o** 型である「来る₃」という語は、単独であれば次のような **SR** 式で表されるものである。

(170) x_2 [類: 人]

(171) e_3 [類: 来る; Theme: ____; Agent: ____]

アマリと否定語ナイが **Merge** し、**LF** で「アマリ～ナイ」となる。そのため、単独では次のような **SR** 式で表すこととする。

(172) [____ () =あまり～ない] u_1

³ 匿名の査読者から、この条件付けでは **p** 型のアマリが同じ節内にあれば必ずアマリ～ナイという形になるはずだが、「あまりの面白くなさに」という場合には「基準値を上回っている」という解釈になり、同じ節内に否定があるということから自動的にナイと結びついた解釈になるわけではないという指摘をいただいた。この点については、まだ考察が至らず、将来の課題としておきたい。

まずは、「人₂」と「来₃る」が Merge した後の SR 式が派生される。o 型が o 型を修飾しているため、次のようになる。

(173) x₂[類: 人]
e₃[類: 来る; Theme: ___; Agent: ___] | x₂

次に、「あまり～ない_{U1}」と「人₂が来₃る」が Merge した後の SR 式が派生される。これは、o 型の語が p 型の語の主要部となっている場合であるから、3.5.2. 節で述べたように、次のような linguistic SR となる。

(174) x₂[類: 人]
e₃[類: 来る; Theme: ___; Agent: ___] | x₂
[___(e₃)=あまり～ない]_{U1}

つまり、この linguistic SR から「来る人数が話者の基準値を下回っている」という意味解釈が得られるのである。

4.6.3. まとめ

以上のように、「アマリ P ナイ」の構文についても、Lexicon で新たに別のアマリを指定する必要性はなく、「アマリノ P ニ、...」や「{アマリニ (モ) / アマリ (アンマリ) } P {ノデ/ト/ナラ} ...、...」と同じように、アマリを p 型として考えると上手く意味解釈ができる。この点は、「否定と呼応するアマリ としないアマリ」という区別をする先行研究とは大きく異なっている。

5. まとめと考察

以上、統語意味論のアプローチにより、アマリの分析を行った。本論文では、(175)のように、Lexiconにおいて、アマリには二種類の指定があると仮定した。そして、Pとして許容される語の特性にはいくつかの条件があるが、(88a) (88b) (88e)のアマリをp型、(88c) (88d)のアマリをo型と仮定することによって、(88)のそれぞれの構文を用いた文の意味解釈を簡潔に説明できることを論じた。このLexiconにおけるp型とo型のアマリの区別は、アクセントパターンにも現れている。p型のアマリは無アクセント、もしくは「アマリ↓」であるのに対し、o型のアマリは「ア↓マリ」である。

- (175) a. [____ () =あまり]_{Un}
 b. e_n [類: あまる; Theme=____]
- (88) a. アマリノ P ニ、 ...
 b. {アマリニ (モ) / アマリ (アンマリ) } P {ノデ/ト/ナラ} …、 ...
 c. P ノアマリ、 ...
 d. P アマリ、 ...
 e. アマリ P ナイ

また、(88c)と(88d)の分析から、o型のアマリには、LFにおいて次のような制約があり、この制約に反すると Merge 後の SR 式がうまく派生されないと考えた。これに対し、p型のアマリにはこのような制約はない。

- (176) o型のアマリと Merge する語は、度合いを持ち、さらにその度合いを表す方向が一方向に定まっていなければならない。

Lexicon でアマリに p 型と o 型の二種類を指定し、この制約を仮定することで、これまで明らかにされていなかった、一見、アマリと P を入れ替えただけのように見える(88a)と(88c)の容認性の違いが説明できた。

(88a)では、アマリは P に対する修飾表現であるのに対して、(88c)では P に対してアマリのほうが主要部となっている。p 型の場合、その主要部から見出しオブジェクトを探し出すことになっている(=57))ので、p 型のアマリが(88c)の構文に生起できないことは当然であるとも言える。それに対して、(88a)で o 型のアマリが生起できないというのは、構造からは導かれない。出来事を指示する o 型の表現であっても、たとえば、「ほしい車」などのように修飾表現になることはありうるからである。その観点から改めて考えてみると、(88a)でも、必ずしも「何かの度合いが話者の基準値を大きく上回っている」状態を記述するだけでなく、「何かの度合いが話者の基準値を越えた」という出来事を指示し、それが次の行動を引き起こす要因となっていることを表している可能性もある。もし o 型のアマリが、(88)のどの構文でも生起することができるとしたら、構文の区別と o 型/p 型の区別についても特に規定 (stipulate) する必要がなくなる可能性がある。

今後、アマリの形態的な範疇と意味的な範疇の間にどうしてずれが生じるに至ったかについても、赤間 (2012) や江口 (2007) を参考にしながら考察していくことが課題である。

謝辞

本稿は2013年1月に提出した修士論文「アマリの構造と解釈」の内容に、加筆、修正を行ったものである。大学院修了後までご指導して下さった、九州大学言語学研究室の上山あゆみ先生に心より謝意を表す。また、匿名査読者2名から大変貴重なご助言を数多くいただいた。深く感謝申し上げる。なお、本稿における議論の不備や誤りは、当然ながら全て筆者の責任である。

参考文献

- 水間陽子 (2012) 「「あまり (あんまり)」の用法に関する史的研究」卒業論文, 九州大学.
- 上山あゆみ (2008a) 「“Prolog 的”意味論の構築と展望」、京都大学言語学懇話会第77回例会発表、京大会館、2008.07.12.
- 上山あゆみ (2008b) 「量化表現の意味は量化子を用いなければ表せないのか」、日本語文法学会第9回大会発表、甲南大学、2008.10.19.
- 上山あゆみ (2008c) 「文理解システム構築を目指して」、『文理解システムの実用化を目指した基礎的研究』平成19年度九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト(P&P)Eタイプ No.19401 研究成果報告書, pp.14-74.
- 上山あゆみ (2011) 「統語論に基づく新しい意味理論の提案」、人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B101, pp.35-40.
- 上山あゆみ (2013) 「構造と意味の対応とズレ：統語意味論の提案」、『文学研究』第110輯, 印刷中.
- 江口 正 (2007) 「形式名詞から形式副詞・取り立て詞へ 数量詞遊離構文との関連から」青木博史 (編)『日本語の構造変化と文法化』33-64. 東京：ひつじ書房.
- 兼行 裕 (2012) 「副詞的用法のアマリの意味制限」卒業論文, 九州大学.
- 岸本秀樹 (2010) 「否定辞移動と否定の作用域」加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美 (編)『否定と言語理論』27-50. 東京：開拓社.
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実 (編)『副用語の研究』176-198. 東京：明治書院.
- 久野 暉 (1991) 『新日本文法研究』東京：大修館書店.
- 新藤一男 (1983) 「「あまり」の文法」『山形大学紀要 (人文科学)』10(2): 101-113. 山形：山形大学.
- 須賀一好 (1992) 「副詞「あまり」の意味する程度評価」『山形大学紀要 (人

- 文科学)』 12(3): 35-46. 山形：山形大學.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法 3』 東京：くろしお出版.
- 服部 匡 (1993) 「副詞「あまり (あんまり)」について一弱否定および過度を表す用法の分析一」 『同志社女子大學學術研究年報』 44(4): 451-477. 京都：同志社女子大學.
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京：東京堂出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (2003) 『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』 東京：くろしお出版.
- 森田良行 (1992) 『基礎日本語辞典』 東京：書川書店.

The structure and the interpretation of *Amari*

Eri Oguchi

(Seinan Jo Gakuin junior and senior high school)

This paper discusses the structure and the interpretation of *amari*, based on the framework of Syntactic Semantics proposed in Ueyama (2008a,b,c, 2011, 2013). The main claim of Syntactic Semantics is that the so-called 'understanding' of a sentence is an outcome established on the meaning of the sentence supplemented by the world knowledge. The meaning of a sentence is further based on the lexical meaning of each word and modified or complemented by the information conveyed by the syntactic structure.

This paper proposes that there are lexically two types of *amari*, one of which is of *type o*, and the other of which is of *type p*. The *amari* of *type o* refers to an event in which the degree of something has exceeded the criterion supposed by the speaker, and it is considered as a cause of the following action. In contrast, *amari* of *type p* adds information to some object that the degree of something exceeds the criterion supposed by the speaker. This paper shows that the similarities and the differences of various constructions which contain *amari* can be accounted for by assuming these two types of *amari*.

(初稿受理日 2013年2月28日 最終稿受理日 2013年6月14日)